

京都・広隆寺とならぶ

日本二大鬼祭

日本二大鬼祭の一つ
雨引山樂法寺の「摩多羅鬼神祭」

あまびきさんらくほうじ
雨引山樂法寺で
約三百七十年の
歴史を持つ伝統的
神事
「摩多羅鬼神祭」開催

満開の桜が散り始めた4月12日(日)、雨引山樂法寺で、摩多羅鬼神と呼ばれる古代インド神が馬に乗り現れる「摩多羅鬼神祭」が行われました。

この祭りは、約370年の歴史を持ち、日本二大鬼祭として、京都・広隆寺の摩多羅祭と並び称されるもので、8年ぶりに昨年からの復活開催されています。

戦火で焼失した樂法寺を摩多羅鬼神が再建

1472(文明4)年、樂法寺の本堂などが戦火により焼失した時、摩多羅鬼神が馬に乗り現れ、大勢の鬼たちを指図し、7日7夜で立派な観音堂を再建し、それがなつた時、鬼たちは火を囲んで踊ったとされています。

摩多羅鬼神と5人の鬼たちが舞い踊る

午前11時、隣接する福祉センター「あまびき」の駐車場を、摩多羅鬼神を先頭に行列

が出発。松明を持った眷族と呼ばれる白鬼・赤鬼・茶鬼・緑鬼・紫鬼と可愛い稚児たちや寺侍と呼ばれる袴姿の人たちなどがそれに続きます。

石段を登りきつた行列が着いた境内には、檀家・観客・カメラマンなどで人集りができ、護摩壇が据えられた竹矢来(竹を交差させてつくった囲い)の内側には、檀家の人たち、摩多羅鬼神と5人の鬼が並びます。

祭りに先立って行われる護摩焚きの後、摩多羅鬼神と5人の鬼たちは、手にした松明に護摩壇の火を採火。その松明を上下に振りかざしながら、摩多羅鬼神が「ドム!」、5人の鬼は「ホイ!」と掛け声をかけ合いながら護摩壇の周りで鬼踊りを披露します。松明を上下に振りかざすこと

で言い伝えどおり、斧で木を割る動作を真似ています。

踊りが終わった鬼たちは、松明を消して本堂の回廊に移動。観客の頭上めがけて、四苦を払うという意味の49本の破魔矢を弓で引き放ちます。この矢を拾うと、無病息災・家内安全で1年を過ごすことができることされ、大勢の人が矢を拾うことを競い合い、随所で歓声が上がりました。

最後に、東の雨引山樂法寺「摩多羅鬼神祭」が馬を使うのに対し、西の京都・広隆寺の摩多羅神は牛に乗って現れます。東西反対の乗り物を使うのは、何かの縁なのではないでしょうか。



2



1



3



6



5



4



8



7

1 2 3 摩多羅鬼神を行列の先頭に、眷族と呼ばれる白鬼・赤鬼・茶鬼・緑鬼・紫鬼の5人、稚児、寺侍と呼ばれる袴姿の人たちなどがそれに続きます。

4 5 6 摩多羅鬼神と5人の鬼たちは松明に護摩壇の火を採火。その松明を上下に振りかざしながら、掛け声をかけ合い護摩壇の周りで鬼踊りを披露します。

7 約370年の歴史を持つこの祭りは、8年ぶりに昨年からの復活開催されています。

8 踊りの後、摩多羅鬼神と5人の鬼たちは、観客の頭上めがけて四苦を払うという意味の49本の破魔矢を弓で引き放ちます。

